

【研究報告】

看護実践力を育成するための VOD システム活用の効果に関する調査

末 廣 久美子*, 百 田 武 司*, 森 本 千代子*, 平 賀 睦*

【要 旨】

目的：VOD (Video On Demand) システムを活用することで、学生の看護実践力の育成にどのような効果を得たのかを評価し、課題を検討することを目的とした。

方法：本学の全学年の学部学生を対象に質問紙調査を実施し、項目ごとに記述統計を行った。

結果：527名に質問紙を配布し、273名から有効な回答を得た(回収率51.8%)。「身についた」と回答した割合が「看護技術力」は66.7%であったが、「コミュニケーション力」、「看護判断力」、「ヒューマン・ケアリング関係形成力」、「チーム構築力」は40%以下であった。

考察：学生自身が主観的效果を得ていたことがうかがえることから、「看護技術力」を強化するための効果は得られたと評価できる。今後は、学生が看護技術の工夫や応用ができるように、思考を強化するための方法を検討する必要があることが示唆された。さらに、看護実践力育成における効果を検討するためには、客観的評価の方法についても検討が必要である。

【キーワード】 VOD システム、看護実践力、活用効果

I. はじめに

近年、情報通信技術が急激な発展を遂げ、マルチメディアやコンピューターの教育活用が急速に拡大しつつある。看護学教育においても、効果的な看護実践能力の育成に向けて e-Learning が導入されてきている。

今日の医療技術の進歩や国民の医療に対するニーズに応えるためには、看護実践能力の育成が重要であり、その一つに看護技術教育の充実がある。一般的に看護技術の教育では、看護技術をイメージ化させて演習につなげていく学習方法がとられており、視聴覚教材が看護実践のイメージ化や理論的根拠の理解などに有効として活用されている。佐居他(2006)の調査でも、看護基礎教育における看護技術教材として、e-Learningの有効性が示唆されている。

日本赤十字広島看護大学(以下、本学)では平成21年度から、卒業後の早期離職予防に資するために、学生の看護実践力の育成に取り組んでいる。その具体的な方法の一つとして、ICT (Information and

Communication Technology) の側面から、VOD (Video On Demand) システムを用いた学習支援環境の整備に向けての活動をしている。本学の VOD システムは、本学教員が作成した VOD コンテンツを、本学学生用 ID とパスワード認証で提供している。平成22年に実施した、看護実践能力の育成に向けた学習支援環境としての VOD システムに関する調査(平賀、森本、百田、末廣, 2011) では、55.9%が「見たいときに見られた」、29.1%が「操作が簡便」と回答し、85.6%の学生が「今後も VOD システムを活用したい」と回答していたという結果を得た。この結果は、山田他(2003)の「オン・デマンド性」と「アクセスの簡易さ」が VOD システムへの学生の満足度に影響を与えている、とする先行研究と同様である。

本学では、基礎となる原理・原則をおさえた上で実際の援助場面を再現し、より臨床実践に近い方法、対象者への対応方法が習得できるように、各領域で工夫して VOD コンテンツを作成している。市販の教材は、実際のケア提供場面が現在の臨床実践にそ

* 日本赤十字広島看護大学

ぐわらないものもあり、タイムリーなバージョンアップも行えない。しかし、自作の VOD コンテンツであれば、随時バージョンアップすることで学生の学びを支援することが可能である。

そこで本研究では、VOD システムを活用することで学生の看護実践力の育成にどのような効果を得たのかを評価し、今後の課題を検討するために、本研究に取り組んだ。

II. 研究目的

VOD システムを活用することで学生の看護実践力の育成にどのような効果を得たのかを評価し、今後の課題を検討することを目的とした。

III. 用語の定義

看護実践力とは、看護技術力、看護判断力、コミュニケーション力、ヒューマン・ケアリング関係形成力、チーム構築力を指す。

IV. 研究方法

1. 研究対象者およびデータ収集期間

平成23年6月から7月にかけて、本学の全学年の学部学生を対象として、自己記入式質問紙調査を行った。

2. データ収集方法

研究協力の依頼書と質問紙を配布し、依頼書に基づいて研究の目的・方法・倫理的配慮・回収方法について口頭で説明し、研究への協力を依頼した。

1) 調査内容

主な質問内容は「VOD システムの活用状況」、「看護実践力育成における効果」、「VOD システム活用への今後の期待」で、選択回答方式を取り入れ、一部自由記載も設けた。

2) 分析方法

調査項目ごとに記述統計を行った。学年間の比較にはフィッシャーの直接法を用いて検討を行った。なお、解析には SPSS Ver.20 を使用した。各項目の自由記載については質的に分析した。

3) 倫理的配慮

本研究は、日本赤十字広島看護大学の研究倫理委員会の審査で承認（承認番号：1103）を得て実施し

た。特に学生には、研究協力は強制ではなく自由意志によるものであり、辞退も可能であること、成績とは無関係であり拒否したことに伴う不利益は全く生じないこと、無記名調査であるため個人が特定されないこと、得られた情報は外部に漏洩しないこと、個人情報を守秘した上で学会や学術誌等で公表することについて、文書と口頭で説明した。なお質問紙の回収方法については、教員の存在が強制力を持たないように事務局前に回収ボックスを設置し、学生自身が投函できるようにした。研究参加への同意については、質問紙の提出により同意が得られたとみなした。

V. 結 果

1. 回収率

1年生141名、2年生136名、3年生141名、4年生109名、計527名に質問紙を配布し、1年生119名、2年生77名、3年生49名、4年生28名、計273名から有効な回答を得た（回収率51.8%）。回答者の内訳を図1に示す。

2. VOD システムの活用状況

1) VOD コンテンツの閲覧状況

VOD コンテンツの閲覧回数は、1回1名（0.4%）、2回以上253名（92.7%）、無回答19名（6.9%）であった。1～2年生の中には50回以上閲覧したと答えた学生が3名いた。閲覧した理由は、「授業や演習の予習・復習のため」、「実習の予習」、「実習前 OSCE (objective structured clinical examination) の事前学習」であった。

2) VOD コンテンツの閲覧場所（複数回答）

VOD コンテンツの閲覧場所は、学内248名（90.8%）、自宅252名（92.3%）、友人宅29名（10.6%）、その他4名（1.5%）であった。その他の閲覧場所としては、「帰省した際に実家で見た」、「実家に帰るバスの中で見た」と回答していた。学外でも VOD コンテンツを閲覧できることについての自由記載は、「どこでも好きな時に見られてとてもいい」、「練習しながら見られるというのが良いと思う」、「休日や実習中でも VOD を家で簡単に見られるようになったのでとても助かる」等であった。

| | | | |
|--------------|--------------|--------------|--------------|
| 1年生 43.6% | 2年生 28.2% | 3年生 17.9% | 4年生 10.3% |
|--------------|--------------|--------------|--------------|

図1 回答者の内訳 (n=273)

3. 看護実践力育成における効果

1) VOD システム活用の効果 (複数回答)

VOD システム活用の効果を、(1) 自己学習に役立った、(2) 技術の要点がつかみやすかった、(3) ケア場面をイメージできるようになった、(4) 技術を実施する際の自信につながった、(5) やってみたいという意欲がわいた、(6) OSCE の学習に役立った、の6項目について尋ねた結果を図2に示す。「自己学習に役立った」91.2%、「技術の要点がつかみやすかった」61.9%、「ケア場面をイメージできるようになった」58.6%、「技術を実施する際の自信につながった」56.4%、「やってみたいという意欲がわいた」22.0%、「OSCE の学習に役立った」(1年生を除く154名対象) 66.9%であった。

2) 看護実践力を身につけるための効果

看護実践力を身につけるための効果として、「看護技術力」、「コミュニケーション力」、「看護判断力」、「ヒューマン・ケアリング関係形成力」、「チーム構築力」の5項目について「身についたと思うか」を

尋ねた結果を図3に示す。「看護技術力」については、66.7%の学生が「思う」と答えていたが、「コミュニケーション力」、「看護判断力」、「ヒューマン・ケアリング関係形成力」、「チーム構築力」については、「思う」と答えた学生が4割に満たなかった。

看護実践力が身についたと思うと答えた学生の学年別割合を、フィッシャーの直接法を用いて比較した結果を図4に示す。「看護技術力」は、1年生と2年生間 ($p < .05$), 1年生と3年生間 ($p < .001$), 1年生と4年生間 ($p < .01$), 2年生と3年生間 ($p < .05$)でそれぞれ有意差がみられた。「コミュニケーション力」は、1年生と2年生間 ($p < .01$), 1年生と3年生間 ($p < .001$), 1年生と4年生間 ($p < .001$), 2年生と3年生間 ($p < .05$)でそれぞれ有意差がみられた。「看護判断力」は、1年生と2年生間 ($p < .01$), 1年生と3年生間 ($p < .001$), 1年生と4年生間 ($p < .001$)でそれぞれ有意差がみられた。「ヒューマン・ケアリング関係形成力」は、1年生と2年生間 ($p < .01$), 1年生と3年生間 (p

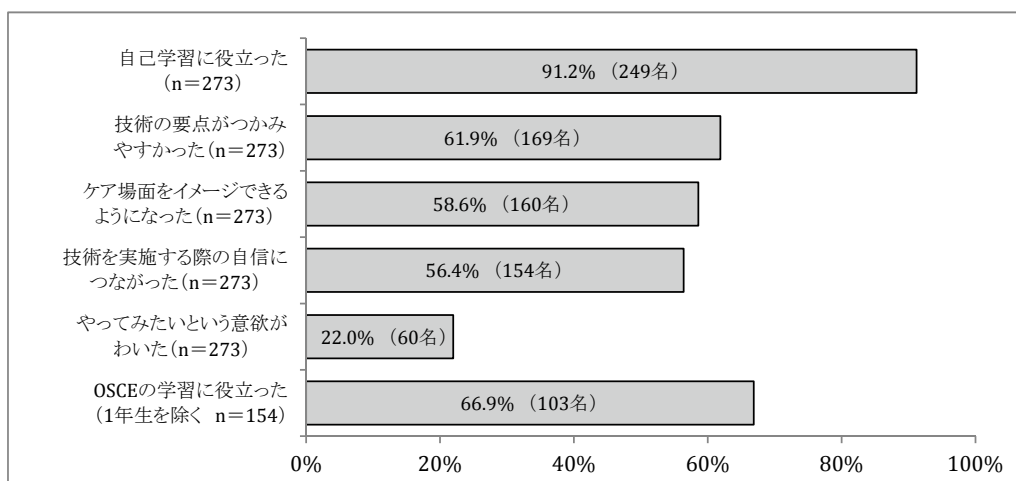


図2 VOD システム活用の効果

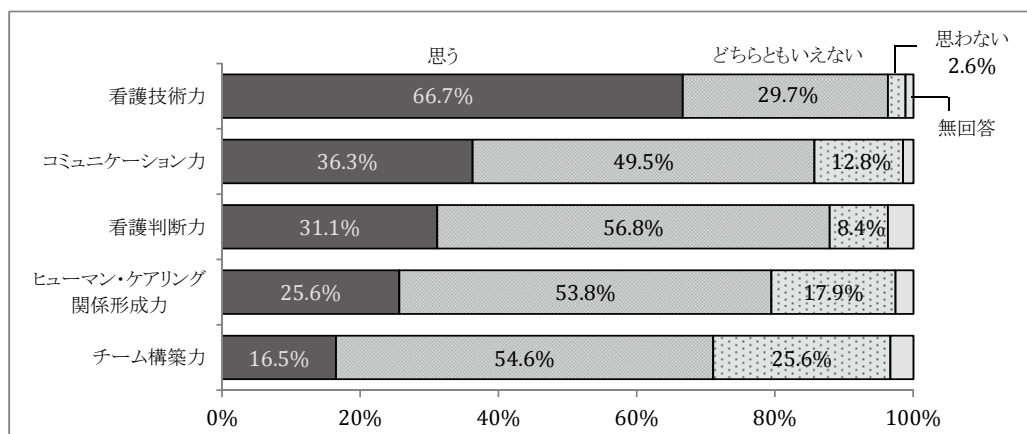
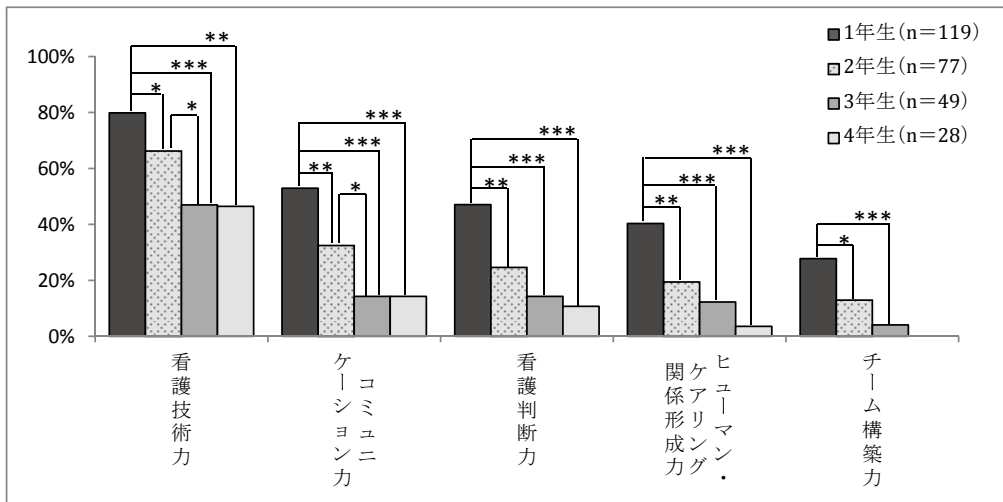


図3 看護実践力を身につけるための効果 (n=273)



(* p < .05 ** p < .01 *** p < .001)

図4 看護実践力が身についたと思うと答えた学生の学年別割合の比較

< .001), 1年生と4年生間 (p < .001) でそれぞれ有意差がみられた。「チーム構築力」は、1年生と2年生間 (p < .05), 1年生と3年生間 (p < .001) でそれぞれ有意差がみられた。「看護技術力」, 「コミュニケーション力」, 「看護判断力」, 「ヒューマン・ケアリング関係形成力」, 「チーム構築力」のいずれも、1年生と比較して2~4年生の方が身についたと思うと答えた割合が有意に低かった。

看護実践力が身についたと「思う」理由の自由記載内容は13の内容に区別でき(表1), 「思わない」「どちらともいえない」理由の自由記載内容は9つの内容に区別できた(表2)。

(1) 看護技術力を身につけるための効果

「看護技術力」が身についたと思うかの問いに対して、「思う」182名 (66.7%), 「どちらともいえない」81名 (29.7%), 「思わない」7名 (2.6%) であった。

身についたと思うと答えた学生の学年別割合は、1年生79.8%, 2年生66.2%, 3年生46.9%, 4年生46.4%であった。

「思う」と答えた理由として、「わかりやすい」(33名), 「イメージできる」(27名), 「映像で見られる」(20名), 「何回も見られる」(18名) との意見が多かった。「どちらともいえない」, 「思わない」と答えた理由は、「実際にやらないと身につかない」(9名), 「身についたとはいえない」(9名), 「VOD だけでは身につかない」(7名) 等であった。

(2) コミュニケーション力を身につけるための効果

「コミュニケーション力」が身についたと思うかの問いに対して、「思う」99名 (36.3%), 「どちらともいえない」135名 (49.5%), 「思わない」35名 (12.8%) であった。身についたと思うと答えた学生の学年別割合は、1年生52.9%, 2年生32.5%,

表1 看護実践力が身についたと「思う」理由

| 記述内容 | 参考になる | わかりやすい | イメージできる | 映像で見られる | 何回も見られる | 自己学習できる | 予習・復習できる | 説明があった | 流れがわかる | 音声が開ける | 役立つ | 客観的に見れた | 理解できる |
|------------------|-------|--------|---------|---------|---------|---------|----------|--------|--------|--------|-----|---------|-------|
| | 記述数 | | | | | | | | | | | | |
| 看護技術力 | 33 | 27 | 20 | 18 | 10 | 8 | | 4 | | 2 | | | |
| コミュニケーション力 | 30 | 7 | 3 | | 1 | | | 4 | | 3 | | | 2 |
| 看護判断力 | 21 | 3 | 1 | | | | | 3 | | | | | 2 |
| ヒューマン・ケアリング関係形成力 | 15 | 2 | | | | | | | | | | | |
| チーム構築力 | 11 | | | | | | | | | | | | |
| 計 | 77 | 45 | 31 | 20 | 19 | 10 | 8 | 7 | 4 | 3 | 2 | 2 | 2 |

表2 看護実践力が身についたと「思わない」「どちらともいえない」理由

| 記述内容 | わからない | VODだけでは身につかない | 実際にやらないと身につかない | そのような場面・内容を見ていない | 意識して見ていない | 技術にのみ注目していた | 身についたとはいえない | 身についたかどうか実感がない | 見るだけで終わった |
|------------------|-------|---------------|----------------|------------------|-----------|-------------|-------------|----------------|-----------|
| | 記述数 | | | | | | | | |
| 看護技術力 | 5 | 7 | 9 | | | | 9 | | 2 |
| コミュニケーション力 | 17 | 15 | 11 | | | 6 | | | |
| 看護判断力 | 20 | 9 | 12 | | 4 | 3 | 8 | 3 | |
| ヒューマン・ケアリング関係形成力 | 19 | 10 | 9 | | 8 | 7 | | 2 | |
| チーム構築力 | 14 | 6 | 4 | 25 | 9 | 5 | | | |
| 計 | 75 | 47 | 45 | 25 | 21 | 21 | 17 | 5 | 2 |

3年生14.3%，4年生14.3%であった。

「思う」と答えた理由は、「参考になる」(30名)、「わかりやすい」(7名)，等であった。「どちらともいえない」，「思わない」と答えた理由では，「わからない」(17名)、「VODだけでは身につかない」(15名)、「実際にやらないと身につかない」(11名)との意見が多かった。

(3) 看護判断力を身につけるための効果

「看護判断力」が身についたと思うかの問いに対して，「思う」85名(31.1%)，「どちらともいえない」155名(56.8%)，「思わない」23名(8.4%)であった。身についたと思うと答えた学生の学年別割合は，1年生47.1%，2年生24.7%，3年生14.3%，4年生10.7%であった。

「思う」と答えた理由として，「参考になる」(21名)との意見が多く見られた。「どちらともいえない」，「思わない」と答えた理由は，「わからない」(20名)、「実際にやらないと身につかない」(12名)、「VODだけでは身につかない」(9名)等であった。

(4) ヒューマン・ケアリング関係形成力を身につけるための効果

「ヒューマン・ケアリング関係形成力」が身についたと思うかの問いに対して，「思う」70名(25.6%)，「どちらともいえない」147名(53.8%)，「思わない」49名(17.9%)であった。身についたと思うと答えた学生の学年別割合は，1年生40.3%，2年生19.5%，3年生12.2%，4年生3.6%であった。

「思う」と答えた理由として，「参考になる」(15名)との意見が多かった。「どちらともいえない」，「思わない」と答えた理由は，「わからない」(19名)、「VODだけでは身につかない」(10名)、「実際にやらないと身につかない」(9名)、「意識して見てい

ない」(8名)等であった。

(5) チーム構築力を身につけるための効果

「チーム構築力」が身についたと思うかの問いに対して，「思う」45名(16.5%)，「どちらともいえない」149名(54.6%)，「思わない」70名(25.6%)であった。身についたと思うと答えた学生の学年別割合は，1年生27.7%，2年生13.0%，3年生4.1%，4年生0.0%であった。

「思う」と答えた理由は，「参考になる」(11名)であった。「どちらともいえない」，「思わない」と答えた理由は，「そのような場面・内容を見ていない」(25名)、「わからない」(14名)等であった。

4. VODシステムを用いての今後の看護技術の学習希望

VODシステムを活用して今後も看護技術の学習を行いたいと思うかの問いに対して，「思う」229名(83.6%)，「どちらともいえない」36名(13.2%)，「思わない」3名(1.1%)であった。

「思う」と答えた理由として，「看護技術力を身につけるのに役立ったから」，「実習の練習の時も見たいから」，「分からなくなったらいつでも学習できるから」，「動画で見たほうが分かりやすいから」との記述があった。

VI. 考 察

1. VODシステムの活用の効果

VODコンテンツを2回以上閲覧したと答えた学生は92.7%で，閲覧した理由として最も多かったのは「授業や演習の予習・復習のため」で，次いで多かったのは「実習の予習」，「実習前OSCEの事前学習」であった。

本学では，日常生活援助技術・診療の補助技術を

学ぶ基礎看護学Ⅱの講義を1年次に開講しており、演習で習得する基礎看護技術項目は全てVODコンテンツが作成されている。また基礎看護学以外の看護専門領域でも、講義の中で学ぶ看護技術項目のVODコンテンツを作成し活用している領域がある。学生が事前にVODコンテンツを視聴し、自己学習をしていることを前提に講義や演習が行われているということもあり、多くの学生が、講義や演習のための自己学習の手段としてVODシステムを活用していると思われる。さらに、実習前OSCEの課題に含まれている看護技術のVODコンテンツを作成している領域もある。アンケートでもVOD活用の効果として、「OSCEの学習に役立った」と答えた学生が66.9%いたことから、OSCEのための自己学習として、VODシステム活用の効果が得られたと評価できる。

VODシステム活用の効果として尋ねた項目の中で、「やってみたいという意欲がわいた」が22.0%と最も低い結果であった。多くの学生は、自己学習手段としてVODシステムを活用しているが、主体的に学習に取り組めるようにするには、学生の興味や意欲を引き出す方法を検討していく必要がある。岩本、南、山内、水野(2006)が間違い探しビデオ教材を活用した学習は、主体的な学習を促進し、学習意欲を喚起するものであったと述べているように、VODコンテンツの中で手順や要点を示すだけでなく、質問形式を取り入れ、学生自身で考え答えを導き出せるようにする等の工夫が必要である。今後学生の意欲を引き出す方法を検討することで、「やってみたいという意欲」の向上につながると考えられる。

VODコンテンツの閲覧場所については、学内90.8%、自宅92.3%となっており、どの学年も学内または自宅で見たと答えた割合がほぼ同じであった。多くの学生がVODを活用して学習することについて「便利である」、「良いと思う」と答えており、VODシステムを活用しての学習効果について91.2%が「自己学習に役立った」と回答していた。渡邊、小木曾(2011)はe-Learningを活用することで、学習効果の向上や学習の自由度が増すというメリットがあると述べている。また、片山他(2007)は、インターネット上で授業情報を配信することは、時間的な制約が生じないため学習促進の効果があると述べている。本学においても同様に、「いつでもどこでも」学習できる環境を整えることで学生の学習意欲が高まり、自己学習促進のための効果に繋がっていると考える。

2. 看護実践力育成における効果

「看護技術力」については、66.7%の学生が「身についたと思う」と答えていた。またVODシステム活用の効果として、61.9%が「技術の要点がつかみやすかった」、58.6%が「ケア場面をイメージできるようになった」、56.4%が「技術を実施する際の自信につながった」と回答しており、過半数の学生が看護技術への効果を実感していることがうかがえる。これらのことから、VODシステムを活用することによって「看護技術力」を育成するための効果は得られたと評価でき、大池他(2001)、越智、栗原(2001)の、VODは看護技術の習得を支援する教材として有効である、との先行研究と同様の結果となった。しかし、学年別で身についたと思うと回答した割合を比較すると、1年生と2~4年生間、2年生と3年生間で有意差が生じている。差が生じた要因として、実習での看護技術の実施経験の有無が考えられる。学内演習で、技術の原理原則とそれを踏まえた一般的な手順は学んでいるが、実習では対象者の状態に合わせて技術の応用をする必要がある。実習で看護技術を実施する際、学生は、対象者の個別性を考慮した技術の工夫に困難を感じている(曾田他、2006;青木他、2008)。そのため、調査を実施した時点で、実習を経験していない1年生や実習での看護技術の実施経験がほとんどない2年生に比べ、実習で看護技術を実施し困難感を体験している3、4年生の方が、「身についたと思う」と回答した割合が低くなっているものと思われる。VODコンテンツの多くは、原理原則を踏まえた一般的な手順に沿って作成してあるため、VODコンテンツを閲覧し模倣するだけでは、対象の状況に合わせた技術の工夫に結びつきにくい。学生の実習における看護技術の困難感を軽減するためにも、今後学生が技術の工夫や応用ができるように思考を強化するための方法を検討し、VODコンテンツの内容に取り入れていくことで、看護実践力育成の効果を高めることができるのではないかと考える。

「コミュニケーション力」、「看護判断力」、「ヒューマン・ケアリング関係形成力」、「チーム構築力」については、「身についたと思う」と答えた割合が4割以下であった。「身についたと思わない」、「どちらともいえない」の理由については、「わからない」、「VODだけでは身につかない」、「実際にやらないと身につかない」が多く見られた。「コミュニケーション力」、「看護判断力」、「ヒューマン・ケアリング関係形成力」、「チーム構築力」は、実際に対象とかわることで培われていくものであるため、VODシ

システムを活用して育成するには限界があると思われる。しかし、「身についたと思う」の理由として、「参考になる」との意見が見られることから、実践場面がイメージできるような臨場感のある援助場面を再現する等の工夫をしてVODコンテンツを作成することで、実践に近い状況での対応方法を学ぶ機会となり、看護実践力を育成するための効果につながると考える。

3. VODシステム活用への今後の期待

VODシステムを活用して、今後も看護技術の学習を行いたいと「思う」と答えた学生は83.6%であった。理由として「分かりやすいから」、「とても参考になるから」、「役立つから」という記述が多く見られた。VODシステムを活用しての学習効果について、「自己学習に役立った」と答えた学生が91.2%おり、学生自身が学習効果を実感できたことが、VODシステムを活用して今後も看護技術の学習を行いたいと思う、という結果に繋がったのではないと思われる。「思う」と答えた割合を学年別に見ると、1年生が90.8%、2年生が80.5%、3年生が83.7%、4年生が64.3%となっており、4年生の割合が他の学年に比べて低い。4年生は、アンケートの調査時点で全領域別実習が終了していたため、調査時点以降VODシステムを活用して看護技術の学習をする機会がほとんどないことから、このような結果になったものと思われる。

4. 本研究の限界と今後の課題

本アンケート調査は、入学時から調査実施時点までの期間での、VODシステムの活用状況やVODシステムを活用しての学習効果などを尋ねる内容になっている。本学では、平成21年度からVODシステムを用いた学習支援環境の整備に向けて取り組んできているが、全領域でVODコンテンツを作成するなど、本格的に活動を開始したのは平成22年度からである。したがって、本研究の対象である1,2年生と3,4年生では、入学時から調査実施時点までの期間のVODシステムを活用した学習状況が、同一の条件であるとは言えないことから、調査結果に影響を及ぼしている可能性がある。また、本研究は全学年の学部学生を対象に調査を行ったが、学年別の回答者数にばらつきが生じ、全有効回答数273件のうち119件(43.6%)を1年生が占めていることも、調査結果に影響を及ぼしている可能性がある。今後は、学年間あるいは同一学年での経年的な比較分析ができるように、調査方法について検討していく必要があると考える。さらに、本調査は対象者の主観的な意見であり、看護実践力育成における効果

を検討するには、客観的に評価することも必要である。そのため、具体的な評価方法について今後検討する必要がある。

VII. 結 論

VODシステムを活用することで、学生の看護実践力の育成にどのような効果を得たのかを評価し、課題を検討することを目的として、本学の全学年の学部学生を対象に質問紙調査を実施し、以下の結論を得た。

1. 「看護技術力」については、過半数の学生が看護技術への効果を実感していることがうかがえることから、VODシステムを活用することによって、「看護技術力」を強化するための効果は得られたと評価できる。
2. 「コミュニケーション力」、「看護判断力」、「ヒューマン・ケアリング関係形成力」、「チーム構築力」は、実際に対象とかがかわることで培われていくものであるため、VODシステムを活用して育成するには限界があると思われる。
3. 学生が看護技術の工夫や応用ができるように、思考を強化するための方法を今後検討する必要があることが示唆された。

謝 辞

本研究を行うにあたり、ご協力くださいました本学学部学生の皆様に深く感謝いたします。本研究は、平成23年度日本赤十字広島看護大学共同研究費の助成を受けて行った。

文 献

- 青木光子, 岡田ルリ子, 関谷由香里, 徳永なみじ, 相原ひろみ, 和田由香里, 野本百合子 (2008). 基礎看護学実習における看護技術実施時の学生の困難と対処法. 愛媛県立医療技術大学紀要, 5(1), 57-64.
- 平賀睦, 森本千代子, 百田武司, 末廣久美子 (2011). 看護実践能力の育成に向けた学習支援環境としてのVODシステムに関する調査. 日本看護科学学会学術集会講演集, 31回, 400.
- 岩本真紀, 南妙子, 山内加絵, 水野静枝 (2006). 無菌操作演習における間違い探しビデオ教材の有効性の検討. 香川大学看護学雑誌, 10(1), 33-44.
- 片山修, 重松豊美, 高田早苗, 寺山範子, 長野勝利, 蛭子真澄, 池川清子, 川上由香, 蓬萊節子, 森下晶代, 山下裕紀 (2007). e-Learningシステムの

導入と授業情報の作成への取り組み. 神戸市看護大学紀要, 11, 49-56.

大池美也子, 大喜雅文, 鬼村和子, 北原悦子, 長家智子, 村田節子, 榊崎美奈子, 立石和子, 吉中里香 (2001). 基礎看護技術教育におけるビデオ・オン・デマンド教材の活用. 九州大学医療技術短期大学部紀要, 28, 1-6.

越智由紀子, 栗原保子 (2001). 看護技術教育における授業改善への試み (Ⅱ). 看護教育, 42(7), 567-571.

佐居由美, 豊増佳子, 塚本紀子, 中山和弘, 小澤道子, 香春知永, 横山美樹, 山崎好美 (2006). 看護技術教材としての e-learning 導入の試み. 聖路

加看護学会誌, 10(1), 54-60.

曾田陽子, 小松万喜子, 水野美香, 大島弓子, 田代ひろみ, 佐藤美紀, 門井貴子 (2006). 基礎看護学実習において実施した看護技術に対する学生の達成感とその理由. 愛知県立看護大学紀要, 12, 67-74.

山田巧, 川畑安正, 西尾和子, 丸口ミサエ, 飯野京子, 西岡みどり, 大原まゆみ, 仁尾かおり, 岡田彩子 (2003). 看護技術教育における VOD (video on demand) システムへの学生満足度に影響を及ぼす要因分析について. 国立看護大学校研究紀要, 2 (1), 24-30.

Effects of use of a video-on-demand system for cultivating practical nursing skills

Kumiko SUEHIRO*, Takeshi HYAKUTA*
Chiyoko MORIMOTO*, Chika HIRAGA*

Abstract

Objective: To evaluate the effects of use of a video-on-demand (VOD) system on cultivation of the practical nursing skills of students and to investigate related issues.

Methods: A questionnaire survey was conducted on all students at nursing university A, and descriptive statistical analysis was performed for each item.

Results: Questionnaires were administered to a total of 527 students, and valid responses were obtained from 273 students (response rate, 51.8%). The proportion of students indicating “acquired” was 66.7% for “nursing techniques” but <40% for “communication ability”, “ability to make nursing judgments”, “ability to develop caring relationships”, and “team-building ability”.

Discussion: The subjective effects reported by the students themselves indicate that the system was effective for enhancing “nursing techniques”. These findings suggest the need in the future for investigation of methods for strengthening the thinking ability of students in order to enable them to apply and adapt nursing techniques. It is also necessary to investigate objective evaluation methods in order to determine the effects of the system on cultivation of practical nursing skills.

Keywords:

VOD system, practical nursing skills, effects of use

* Japanese Red Cross Hiroshima College of Nursing

